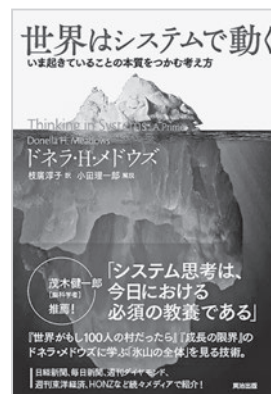


『世界はシステムで動く いま起きていることの本質をつかむ考え方』

ドネラ・H・メドウズ 著 枝廣淳子 訳 英治出版 2,090 円 (税込)

複雑化した問題の解決手段

会員 高橋 梨紗 (67 期)



本書は、様々な問題解決の助けとなり得る「システム思考」(小田理一郎氏による「解説」)によればシステム思考にもいくつかの学派があるが、本書で紹介されているのは、「システム・ダイナミクス」学派のもの)を紹介、解説した本である。システム思考が、ビジネスにおける問題、社会問題、経済問題、地球環境問題などの課題の解決に有用であることが説明されている。もちろん、より身近な問題である職場や家庭での人間関係や仕事の問題にも活用できるとのことである。

本書の著者、ドネラ・H・メドウズ氏は、化学及び生物物理学を修め、システム思考を用いて経済、環境、社会問題に取り組んだ。また、研究者からジャーナリストへ転身し、数々の書籍等の出版物を残している。『成長の限界』(書籍)や『世界がもし100人の村だったら』の原案となったエッセイも本書の著者が執筆したものである。これらの出版物の方が馴染みのある方もおられるかも知れない。

私も大学時代に化学を専攻していたことから、理系出身である著者が、システム思考を用いて社会や経済の問題解決に取り組み、ジャーナリストとしてわかりやすく発信しているというところに興味を持ち、本書を手にとった。

本書では、システムとは何か、システム思考の必要性、その活用方法などが指南されている。著者は、問題が続くことを望んでいる人はいないのに問題が解決できないのは、(ほとんどの)問題は、「本質的にシステムの問題だから」であり、「システムを“再構築する”」

ことで問題が解決に向かうと述べる。そして、問題を生じさせる構造を理解するためには、システムの構成要素だけでなく、構成要素間の「つながり」や「機能」「目的」の理解も重要であると述べる。私たちは、認識しやすいものや出来事について目を向けがちであるが、問題には様々な事柄が相互に関連しており、その関連性を明確にして全体像を見ることの重要性を説いている。本書は抽象的な内容ではあるものの、具体的な例を用いながら、システム思考を解説している。

特に興味深い部分は、システムを再構築するために、システムの中で介入すべきポイントが記載されている、「第6章 レバレッジポイント」と、システム思考家の知恵や教訓が記載された「第7章 システムの世界に生きる」である。個人的には、第7章に記載された「複雑性を祝福する」という教訓が印象に残った。人はつい、複雑さを避け確実なものを求めてしまう。私たちは非常に複雑化した社会に生きており、急速な変化の時代に生きている。複雑なものを複雑なものとして受け入れ、直視できる心の余裕や柔軟性を持ちたい。なお、前述の小田氏の「解説」には、システム思考の具体的な活用方法が初級レベルから説明されているので、こちらも参照されたい。

問題の本質を捉えるための一つのツールとしてシステム思考を学ぶことは、個人としての問題解決のためにはもちろん、弁護士として依頼者や社会が抱える問題に向き合う際に有用となるのではないかと思います。本書を推薦させていただいた。ぜひ多くの方に読んでいただきたい一冊である。